

手・不得手がある。総観気象学はわが国にとっては不得手な分野らしい。しかし一般の人は気象学といえば天気予報の科学と思うほど、温帯低気圧は気象学の中心課題の一つであり、わが国付近は世界有数の低気圧の発生・発達地であることを考えると、上記の事態は少し不思議ではなからうか。Thorpe は (QJRMS, 1991, 1376-1377), 熱帯外低気圧は大気大循環に次いで最も研究さ

れた気象現象であり、研究は現在も継続中であるだけでなく、拡大および加速されているようにみえる、と述べている。わが国には、大学で総観気象学の教育も研究も殆どしていないこと、四方が海で気象データが入手しにくいこと、その他のハンディがあるが、もっと活潑な研究がされることを願うばかりである。

(イリノイ大学名誉教授 小倉義光)

**編集後記:** 気象庁では、アメダスやレーダーをはじめとする気象観測を精度よく実施するために、観測環境の調査を行い設置場所の見直しや機器の更新のための地味な作業を日夜行っています。こうした作業を通して得られた観測データは天気予報等の気象業務の推進を支えてきたと同時に、これまでの大気科学の発展の基礎になっています。今後も大気科学のさらなる発展に貢献できるような新しい技術を駆使した観測システムの確立・導入をめざすこととしています。

こうした意味で、気象学会つくば92 (1992年春期大会) のシンポジウム「新しい観測システム」はタイムリーな企画であり非常に興味深いものでした。また、大会実行委員会の努力で編集されたプロシーディングも充実したもので観測システムの現状と新しい観測研究の動向をつかむ上での好資料となるものです。

この企画を足がかりに、大気観測システムに関連する研究がこれまで以上に推進されることを期待するとともに、その成果を天気をはじめとする気象学会の出版物や

関連の研究会等で広く公開できるよう少しでも役に立てたらと考えています。

(中井公太)

長い間「天気」編集委員会の編集書記として、機関誌の発行に献身的に努力された西沢美佐子さんが、都合で退職されます。正確にかつ迅速にという相反する要求を満たしながら、毎月定期的に機関誌を発行することは大変な仕事です。西沢さんはこの困難な仕事を的確に処理され、「天気」の定期発行に多大の貢献をされました。この場を借りてお礼申し上げます。本当にご苦勞様でした。

1月号からは新しく大井戸和子さんが編集書記として仕事を担当されます。現在は仕事を憶えるための特訓中です。1月号からは印刷をCPS化するため、編集作業の手順も一部変更されます。このため、編集作業に慣れない間は会員の皆様にはご不便をおかけすることがあるかと思いますが、編集委員会の事情をご理解いただき、会員の皆様のより一層のご協力をお願い致します。

(編集委員長)